

彙報

相愛大学総合研究センター研究プロジェクト活動報告

総合研究センターは平成30年度から新たに「大学アーカイブの構築」というプロジェクトに取り組んでいる。相愛学園そのものの歩みを見つめ直そうという試みである。今年度は4回の研究会を開催した。

プロジェクトについて

相愛学園は長い歴史を持っているが、資料の乏しさと整理の不十分さによって、その歴史の実態を知ることが困難である。各種の資料は学内の各部署で収集保管されているが、十分に整理されているとは言えず、資源の利用も簡単ではない。また、教育や研究に携わった教職員やその業績についても情報が整理されておらず、音楽学部の山田耕作、短期大学国文科・人文学部の田中重太郎以外、学内でもほとんど知られていない実情である。

相愛大学と相愛学園の将来を考える基盤として、現時点で収集できる資料を収集し、整理を行い、継承してゆく必要がある。また、収集されている資料も、定期的な展示を行っているものもあるが、簡易な目録の作成すらできていなかったり、関係者以外には存在さえ知られていないものもある。本学の蓄積した資源についての情報を構成員が共有することは、学外への情報発信の基盤の一つとなるはずである。当初の計画は以下の通りであるが、このような試みはほとんど行われてこなかったため、プロジェクトに従事するメンバーの作業の進捗に伴い、新たな資料が見つかったり、計画に加えるべき項目が出てきたりする。本学に所属した教員の業績について新たな視点から検討を加えることも必要である。当初の計画に修正を加えながら、

継続してプロジェクトに取り組む予定である。現在、部分的にでも取り組んでいる作業は下記のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ。Ⅴは時間をかけて取り組んでゆくことになろう。

Ⅰ 学園史関係資料の収集・整理・調査

- ①各種の文書類の収集と整理
- ②旧職員への聞き取りと旧職員所蔵資料の収集
- ③過去に学園が実施した事業についての調査
- Ⅱ 在職した教職員の業績に関わる調査研究
- Ⅲ 相愛学園出身者の業績に関わる調査研究
- Ⅳ 収集された資料の収集・整理・調査

学術的に有意義なコレクションが収集されいるが、関係者以外に知られていないものが多く、活用されていない。とくに、以下のコレクションについて、より詳細な調査、整理、広報を実施する。

- ①折口文庫
- ②柿谷文庫
- ③春曙文庫
- ④仏教音楽コレクション・A（飛鳥コレクション）
- ⑤吉田文庫

Ⅴ 教員データベース（戦後編）の構築

令和1年度の総合研究センター研究会は4回実施され、上記のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳに関わる報告がおこなわれた。

以下、第1回から第4回までの研究会の概要を報告する。

研究会概要

第1回

報告者：千葉真也

(相愛大学人文学部教授)

テーマ：相愛女専音楽科設置関係文書－音楽学部の源流－

日時：2019年10月16日(水)

午後4時40分～午後6時10分

場所：相愛大学3号館135教室

相愛学園は、空襲のために戦前の資料をすべて失ったと言われ、資料の乏しさへの嘆きは『相愛学園七十年の歩み』や『相愛学園百周年記念誌』に繰り返されている。

だが、戦前の資料が全部失われていたわけではなかった。昭和三年、相愛女子専門学校が設置され、北河内郡門真町、京阪の古川橋付近に校地をもとめ、「古川橋分教場」が設置された。そこには四條畷高女が使っていた土地と古い校舎があり、女専の校地として好都合であった。この古川橋分教場は空襲を免れ、女子専門学校に関する書類の一部が現存することが分かった。書類の成立時期は昭和3年から昭和20年8月ごろまでである。相愛女子専門学校と財団法人相愛女学園の設置、昭和12年の音楽科増設等に関わって文部省や大阪府に提出した書類、昭和11年に行われた文部省の調査において提出された書類などが含まれる。

「昭和三年起 財団法人相愛女学園書類綴」として、保管されていたこれらの文書は、長い間忘れられた存在であった。今回は相愛大学音楽学部に関連する文書の一部(女専規則変更理由、古川橋校舎沿革、音楽科教員予定者)を紹介した。「女専規則変更理由」だけを、ここに掲載する。原文はカタカナ漢字交じりで記されているが、「ラヂオ」以外のカタカナをひらがなに改めた。また、句読点を補っている。

変更理由

相愛女子専門学校創設に際しては、当時の社会情勢を察し、女子にして社会事業に従事せんとする希望者相当多数可有之を予想し、社会事業科設置を申請、御許可を得居候処、爾後該科の希望者僅少にして、遂に未開講のまま今日に及び申候。然るに、近來ラヂオ等の影響を受け、音楽的趣味の向上及び一般化は当地方に於ても著しきもの有之候、のみならず由来本校設立の主旨たる宗教的情操の陶冶の点より見て、音楽家として本人の人格的基礎を宗教的教養に置くは勿論、社会一般の宗教的情操涵養の上より見るも、宗教的教養の上に立つ音楽指導者を養成して国家風教の是正に資することは、最も有意義なる事業と思考仕候。而して、関西に於ては、音楽教養の機関は大坂音楽学校及神戸女学院音楽部のみなるを以て、仏教的教養に基く音楽部の施設は必ずや相当の効果を挙げ得べしと確信致候。依て別紙の通り変更御許可を申請したる次第に候。

第2回

報告者：鈴木徳男

(相愛大学人文学部教授)

テーマ：柿谷雄三氏旧蔵資料について

日時：2019年11月20日(水)

午後4時40分～午後6時10分

場所：相愛大学3号館135教室

柿谷雄三氏旧蔵資料について

昭和37年(1962)から平成10年(1998)まで相愛女子短期大学に在職した柿谷雄三が収集所蔵した古典籍等390点が、没後の平成26年(2014)7月に本学に寄贈され、貴重資料室に収められている。

柿谷は、相愛大学・相愛女子短期大学図書館長の任にあったほか、春曙文庫実行委員代表として田中重太郎のコレクションを主体とする春曙文庫の整備に尽力した。柿谷は、田中の傍にあって『枕草子』研究の完成に献身したが、田中と同じく蔵書家であった。蔵書の全体像は相愛大学図書館に在職した西田恵子作成の「柿谷雄三氏旧蔵書（柿谷文庫）書誌目録稿」によって知ることができる。

今回は柿谷がとくに深い関心を持っていた藤井高尚（1764～1840、本居宣長の高弟として知られた国学者）関連の資料を中心に紹介した。高尚関係資料は寄贈された旧蔵書中、30点近くを占めているが、その中でも『伊勢物語新釈』の著者自筆校正本は学術的価値のとりわけ高いものである。

発表の概要は以下の通りである。

- 1 柿谷雄三先生の略歴
- 2 旧蔵書が本学に寄贈された経緯
- 3 旧蔵書のうちから

『春曙抄』書入本と『伊勢物語新釈』著者自筆校正本を詳しく解説した。

○『春曙抄』書入本

- ①田安家旧蔵賀茂真淵書入本
- ②藤井高尚書入本
- ③関根正直諸注書入本

『枕草子』の代表的な注釈である北村季吟著『春曙抄』への諸家の書入本である。

①は真淵が仕えた田安家から出たものであるが、真淵の『枕草子』研究を知りうる唯一の資料。原雅子によって紹介されたことがある。

②については柿谷が「春曙抄の説を補い正す書入本か、または著述が用意されていた」、「何かの基礎資料（下書）をもとにして、ていねいに浄書したもの」などと述べている（「藤井高尚の枕冊子研究について」『相愛大学
相愛女子短期大学 研究論

集』第十三卷第二号
第十三卷、昭和41年（1966）2月）。

○『伊勢物語新釈』著者自筆校正本

『伊勢物語新釈』は、文政元年（1818）9月彫成、巻末に「奴豆能舎蔵板」（ぬでのやぞうはん）とあり、京都の書肆で宣長門人でもあった城戸千楯の私塾鐸屋が刊行、藤井高尚の著した注釈書の代表的なもので、江戸時代に作られた『伊勢物語』注釈の中で最も高く評価される。その著者校正本で、刷り上がった本の随所に細かな指示を与えている。その具体例を図版で示した。

4 柿谷雄三先生の「藤井高尚」研究

柿谷雄三が、藤井高尚に強い関心を持っていたことを、柿谷の研究論文と旧蔵書の内容によって確認した。最後に、柿谷執筆の日本古典訳叢書月報31「田中重太郎博士と春曙文庫」を紹介した。この月報は田中重太郎の遺著となった『枕草子全注釈』最終巻に付けられたものであり、柿谷は『全注釈』の協力者の一人であった。（敬称略）

第3回

報告者：長谷川精一

（相愛大学人文学部教授）

沼田潤

（相愛大学人文学部准教授）

テーマ：老年学の祖・橘覚勝の足跡

日 時：2020年1月8日（水）

午後4時40分～午後6時10分

場 所：相愛大学3号館135教室

日本における老年学の開拓者である橘覚勝について紹介した。橘覚勝は1900年、大阪に生まれた。東京帝国大学の文学部心理学科を卒業した橘は戦前（1928年）から浴風園で老人についての調査研究を始めている。戦後は大阪大学法文学部（後に文学部）に勤務し、大阪大学

定年退職後、1963年から1972年まで相愛女子大学に勤務した。なお、橘は阪大在職中も青年心理学・教育心理学を相愛で教えている。

橘覚勝の業績は、

- ①高齢者に関する心理学的研究
- ②傷痕軍人に関する論述
- ③国防心理学に関する論述
- ④老年学の提唱

に大別される。①～③は戦前戦中期、④は戦後の業績である。今回は③と④を取り上げた。

国防心理学に関する論述として橘の「戦場における将兵の心理」（1941年）、「敵愾心」（1943年）を紹介した。さらに同時代人の「戦中」と「戦後」として、東京大学教育学部教授であった宮原誠一の『少国民の生活文化』（戦中）、「平和と教育」（戦後）、詩人の高村光太郎の「神これを欲したまふ」、「決戦の年に志を述ぶ」、「覆滅彼にあり」、（以上戦中）、「典型」（戦後）などを紹介し、橘との比較を試みた。

④については『老年学』（1971年）、『老いの探求』（1975年）など、老年学に関わる橘の主要な業績を紹介し、橘の提唱する老年学の概要と現代的意義についてまとめた。戦前戦中の業績のうち、高齢者に関する心理学的研究と傷痕軍人に関する論述については今後の課題とする。

第4回

報告者：荒井真理亜

（相愛大学人文学部准教授）

テーマ：相愛で育った作家たち

日時：2020年1月8日（水）

午後4時40分～午後6時10分

場所：相愛大学3号館135教室

戦前の相愛高等女学校出身である岡部伊都子と山崎豊子について相愛高等女学校との関わりを中心に発表し、戦後の作家活動の萌芽ともい

うべき学会未紹介の資料を紹介した。

発表の概要は以下の通りである。

はじめに

山崎豊子・岡部伊都子・水野多津子による鼎談により、相愛高等女学校が二人の作家の母校であることを、確認した。

岡部伊都子・山崎豊子の略歴

『大阪近代文学事典』により、二人の作家の略歴を紹介した。

相愛の思い出

『相愛学園75周年記念誌』所収の「私たちの頃の相愛」（山崎）、「この学園」（岡部）などにより、在学中の思い出を確認し、後の文学活動との関わりを探った。

作家志望の背景

「加害の女から－兄と婚約者へ」（岡部）、「産声」（山崎）により、二人の作家の文筆活動の出発点を確認した。

雑誌『相愛』の書誌

相愛高等女学校（相愛高等女学校校友会・相愛高等女学校報国団）が発行した雑誌『相愛』の書誌を紹介した。本学には昭和8年3月発行の第58号から昭和18年3月発行の第68号までの所蔵が確認されており、岡部と山崎の在学期間をカバーしている。多色刷りの表紙のある実物数点を研究会の折に展示した。

雑誌『相愛』から見える時代状況

第63号（昭和12年12月）、第65号（昭和14年12月）、第68号（昭和18年3月）の編集後記を引用し、時代状況を確認した。

学会未紹介資料

雑誌『相愛』には掲載された岡部と山崎の文章は、おそらく学会未紹介であるが、戦後、めざましい活躍を遂げた二人の最初期の作品。注目すべきものである。『相愛』に掲載された「ボートのり」、「千人針」、「淡路」（岡部）、「淡

路島]、「海の夜情」、「曠野」、「雲」、「現代の学生」(山崎)からいくつかの作品を具体的に紹介した。

おわりに

岡部の多彩な活動が「人間が人間として生き

ることへの希求」に貫かれているとする尾形明子「人間として生きることへの希求」(岡部伊都子集4 月報4)を紹介して結びとした。なお、「岡部伊都子 図書館所蔵リスト」を配布した。

令和元（2019）年度 人文学部公開講座

人文学を楽しむ PART 3

総合研究センターが後援した人文学部の公開講座「人文学を楽しむ Part 3」の概要を記す。

各講座とも相愛大学本町学舎 F 604 教室を会場として毎回午後 2 時から 4 時まで、人文学部の教員によって五回開催され、それぞれの専門分野（東洋史・社会学・仏教学・臨床心理・サブカルチャー）の内容を存分に話した。日程、題目および担当教員と要旨は以下の通り。多くの聴衆があり、人文学の広がりとし深さを楽しんでいただけたものと思われ、一定の成果をあげた。

第 1 回 6 月 8 日（土）

「私説三国志 - 三大戦争の史実 -」

教授 中村圭爾

戦乱に明け暮れた三国時代という通念があるこの時代、とりわけ有名でありかつ重要であるのが、曹操と袁紹が対決した官渡の戦い（200 年）、曹操対劉備孫権の赤壁の戦い（208 年）、そして劉備と孫権の夷陵の戦い（208 年）の三回の戦役である。それは大規模であっただけではなく、多くのエピソードに彩られ、また、戦場の所在地および原因や結果からみて、後漢末三国初数十年の歴史の画期や転換点となり、三国時代を正確に理解するうえで、たいへん大きな意味を持っている。そのことに着目して、この戦役の評価についてのあらましを紹介させて頂いた。

官渡の戦いは、後漢最後の皇帝である献帝を庇護した曹操が、その名のもとに天下に号令するのを疎ましく思った袁紹が、献帝の奪取を企

んだのが直接のきっかけである。ただ、その背景には、その前年までに徐州の争乱を平定し、劉備を配下に取り込んだ曹操が、次の戦略として河北の雄袁紹に狙いを定めたこと、また将来の難敵と目していた劉備が曹操のもとを脱出して袁紹と合流したことがあろう。

その戦場は、主として曹操の本拠地に近い黄河南岸部であったが、袁紹を大破した曹操は、黄河以北に進出し、戦後数年で袁氏を滅ぼしその旧支配地を制圧して、黄河下流南北に大勢力圏を築き上げた。

その直後に曹操の南進が始まり、赤壁の戦いが勃発する。この戦役は、その進軍方向から見て、明らかに長江中流の戦略的戦術的要地荊州に狙いを定め、かつその荊州の支配者劉表を迎えられ、新野に駐屯する劉備の追討を目指すとともに、長江下流の新興勢力孫権にまで力を及ぼそうとした曹操の戦略に基づくものであった。

戦場である赤壁は荊州のほぼ中央、長江沿いの地であり、曹操大敗の結果、要地荊州は、曹操にとっては長江流域への橋頭保、劉備にとっては諸葛亮の著名な天下統一戦略「草廬対」（いわゆる天下三分の計）の拠点、孫権にとっては長江流域を支配し曹操に対抗しようとする戦略の要点として、三者の勢力が拮抗する重要地域となった。

戦後、時を経ずして、曹操の関中への進出が始まる。これは、劉備・孫権の割拠する荊州を避け、地理的には困難が伴うが強大な抵抗勢力のいない関中・益州を経由した天下統一の戦略の発動である。この結果、劉備の益州入り、関羽の北上と孫権軍の奇襲による敗死、曹操の急死と漢魏交代、劉備の即位と、事態が急展開する。

この一連の動向の中で出来たのが、劉備の

荊州出兵に発する夷陵の戦いである。一般に知られているその原因は、関羽を敗死させた孫権に対する劉備の怒りであるが、しかし荊州は益州と並んで、諸葛亮の天下統一戦略の二大拠点であり、この戦略を信奉する劉備にとっては不可欠の土地であったことを考える必要がある。

この戦いの結果、敗れた劉備は益州に封じ込められ、荊州の大半を押さえた孫権は長江を拠点に魏と対抗し得て、三国分立の形成が出現したのである。

第2回 7月13日(土)

「沖縄の軍用地と郷友会」

教授 藤谷忠昭

米軍上陸後の沖縄戦を概観した後、現在の沖縄市域の集落の人々の戦前の暮らしについて紹介した。また米国に接収された土地をめぐる闘争について、米軍統治、日本復帰という戦後の歴史と関連づけながら概説した。こうした歴史的経緯の中で、現在の嘉手納飛行場及び嘉手納弾薬庫に集落を形成していた人々及び子孫により郷友会が結成された。本講座では、そのうち現在の沖縄市域に集落があった郷友会について検討した。

沖縄市には、13の嘉手納飛行場及び嘉手納弾薬庫に集落があった郷友会が確認されており、そのうち3つは、土地の半分が基地内に、もう半分が基地の外にある。一方で、10の郷友会は、かつての集落全体が嘉手納基地の中に位置する。行事として、敬老会、学事奨励会、新年会、ピクニックなどが行なわれている。また、基地の中に残された拝所や、基地の外に移設された拝所を中心に伝統的な神事が行われているところもある。資金に余裕があれば、かつての集落の地図や模型がつくられたり、集落の歴史をまとめた郷友会誌が編纂されたりしてい

る。それらの活動は、主に基地内の共有地に対する軍用地料に基づく場合が多く、潤沢な郷友会は事務所を持つところもあるが、全くないところは、集まるだけでも苦労しているという。年月を経るに連れ、集まる人々は減り、資金である軍用地料も目減りしているところが多い。

沖縄市域の中で最も北に位置する倉敷郷友会は、集落のすべてを米軍に接収された。もともと大工廻村の屋敷集落で、寄留民が開拓した。戦前、製糖会社が莫大な土地を持ち、30年経過後、耕作者に払い下げる約束をしていたが、30年になろうとしたときに戦争となり、多くの土地は会社と県の土地になった。戦後、疎開から戻ってきたら米軍が駐留しており、1959年、米軍のダム建設で、集落の中心的部分が水没した。1995年に返還されたが、いまは県営の倉敷ダムとして、沖縄県が管理している。戦後、郷友会活動が始まり、約300名の会員が所属し、敬老会、総会、新年会などを行っている。また、昔の写真を基に1940年ごろの集落の模型を制作し、倉敷ダムの県事務所に設置している。もともとの拝所は水没したので、ダムの敷地に拝所を設置し、神事を営んでいる。会長自身も戦後生まれで、当時の集落に住んでいた人も少なくなっている。郷友会誌編纂、定款制定などが課題だという。郷友会館の設置や認可地縁団体の例外的な認可などを、政府に求めているということであった。

このように沖縄戦で私有地が接収され、基地の存在で多くの土地が未返還となっている。かつての集落の住民は、土地がなくなった後も、郷友会を結成し、共同性を継続しようとしている。軍用地の中の共有地への地代は、共同性の維持に対する、ささやかな支えになっているといえる。

第3回 9月21日(土)

「『歎異抄』と蓮如上人－人々を救う言葉のはたらき－」

准教授 佐々木隆晃

秋彼岸の時期に、大坂本願寺を起源とする北御堂の境内ともいえる場所に建つ相愛大学本町学舎で人文学部公開講座をご一緒した。ビジネス街のただ中で、彼岸、すなわち阿弥陀仏の西方浄土に思いを馳せる、その意義を、『歎異抄』と蓮如上人の言葉のなかに味わう機会とさせていただいた。

浄土真宗とは親鸞聖人によって開かれた宗派の名称であるが、親鸞聖人は往生浄土の真実の教えのこととして用いられた。「生死の苦海ほとりなし ひさしくしづめるわれらをば 弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける(高僧和讃)」と述べられるように、迷いの世界、煩惱の世界である娑婆世界(此岸)に生きる私が、真実の世界、生死の迷いを超えたさとりの世界である西方浄土(彼岸)に到ることができるのは、阿弥陀仏の本願による救いだけ一つであるというものである。

彼岸とは梵語パーラミターの意識である到彼岸のことであり、彼岸である浄土に到りつつある仏教徒の生き方を見つめる仏事といえる。つまり、彼岸を見つめることは、彼岸へと向かって生きる私の日々の歩みを見つめることになる。

浄土真宗で最も有名な書物の一つ『歎異抄』は、親鸞聖人の教えをよく伝える聖典として、特に近代以降、多くの人々に生きる希望の光を与える書物となってきた。一方で、浄土真宗の教義的特徴をよく表している「悪人正機」という教説が、一般の人々に誤解されて受けとめられる等、扱いが難しい。そこで「悪人正機」を示す、『歎異抄』第三条の文言を一つ一つ確認

してみると、「善人」とは、「悪人」とは、「他力をたのむ」とは、等々、読み進めていくなかに、自身の姿を問い、真実の道に導かれつつあるという、阿弥陀仏の救いのなかにあることを実感できる。

『歎異抄』第四条には、「いかにいとほし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがなければ、この慈悲始終なし」と、人生のやるせなさ、悲しみ悩みの尽きない歩みのなかに、阿弥陀仏の慈悲のあたたかさが明らかになる。『歎異抄』第一条は浄土真宗の教義が明確に示される一文だが、そこには阿弥陀仏の救いのなかに摂め取られた浄土真宗の生き方が明らかにされている。それは「浄土真宗の生活信条」第一条と照らし合わせると一層明らかである。

大坂の地に念仏をひろめた本願寺第八代の蓮如上人は、その生涯のなかにさまざまな悲しみを背負っていた。大阪湾を望んで西の海に沈む夕日を眺めるとき、これまで見送ってきた先人を想い、自身の生まれ往く浄土を見つめるなかに、浄土真宗という生き方が自身の歩みとして受けとめられるのではないだろうか。

第4回 10月5日(土)

「ストレスと上手につきあう－臨床心理学からみる心の健康－」

准教授 坂田真穂

近年、ストレスを契機として発症する心身の病が社会的問題となっている中、現代人には、ストレス社会を生き抜くスキルやレジリエンスが求められている。このような社会背景から、本講座では、ストレスの本質を概説するとともに、心身の不調につながるメカニズムや対処方法について、臨床心理学的視座から紹介した。

ストレスは、「万病のもと」となる「現代の問題」という印象が強い。しかし実際は、現代

特有のものではなく、人類がこの世に現れた時から備わっていた原初的の反応である。それは本来、危機的状況で体験される心身の反応であり、これにより私たちは危険を察知するとともに、「火事場の馬鹿力」なるものを発揮して回避してきた。個体の安全と種の保存という意味で、ストレスは人類にとって重要な反応だったのである。

しかし、その原初的の反応が、現代の危機的状況、すなわち「職場の人間関係」や「家庭の問題」などで発現することにより、古代の狩りや戦による危機と比して、ストレスに晒される時間が長くなった。ストレス下で人は、自律神経、ホルモン分泌、そして免疫系の順に異常が生じるという医学的知見は、長期間におけるストレスへの曝露が心身の不調を誘発することを示唆している。ストレスは本来重要な反応であるものの、現代のストレスの長期的なあり方が問題だといえる。

また、ストレス反応の強弱には個体差があり、自己抑制傾向および完全主義傾向といった性格特徴がストレスと密接に関わっている。とはいえ、日常的にストレスを感じている人は約7割に上る [1] ともいわれており、現代社会においてストレスと無縁の生活を送ることは難しいだろう。また、ストレス源そのものを排除することが困難なケースも多いことから、ストレスは、無くすことを目指すのではなく、ストレスに気づき、こまめに解消することが現実的な対処方法だと思われる。心身の病に至れば服薬治療を要するが、ストレス段階で気づけば、自身で解消し、健やかな生活を継続できる。万人に有効なストレス解消法はないため、自分に合ったストレス解消法を見つける必要があるが、ストレス状態に陥ってから新たなストレス解消法を模索するのは困難である。したがっ

て、日頃からストレス解消法を見つけておくことが大切である。

引用文献

- [1] Rinnai, 「ストレス」に関する意識調査 (2018年5月5日), 【<https://www.rinnai.co.jp/sp/releases/2018/0515/>】 (2019年10月2日取得)

第5回 2月15日(土)

「変わりゆくアニメの楽しみ方」

准教授 高木学

本講義は1990年代以降のアニメを対象に、(1) アニメ作品自体の変化を追うこと、さらに(2) アニメファンの楽しみ方の変化をたどることの2点を論じたものである。本論では、その2つの流れを追いながら、背景にある社会情勢・若者気質の変化等を考えてみる。

(1) アニメ作品自体の変化：深夜時間帯におけるアニメ放映数の増加により、多種多様なアニメ作品が提供されてきた中で、似た特徴を持つアニメが続けて人気作としてヒットすることが幾度も見られた。特に2010年代の傾向は、1 極端な性格・趣味を有する「痛い・残念な」キャラクターの増加、1 異世界転生を組み込んだ作品の増加、1 女性ファンを想定した美男子主体の作品の増加などが挙げられる。これらの作品に共通するのは、アニメを視聴する、今の若い視聴者層のもつ日常的な違和感やわだかまりをほぐし、共感・癒しを提供することができているという点である。

(2) アニメファンの楽しみ方の変化：作品世界やキャラクターを楽しむ方法も時代によって変化し、多様なスタイルが見られるようになってきた。2010年代の傾向では、1 ファンが作り出したイラスト・同人誌・動画配信の増加、1 2.5次元と呼ばれるアニメから派生した舞台・ミュージカル作品の増加、1 声優を活用した

ライブイベントの増加、1アニメに関する都市・地域を旅するアニメ聖地巡礼の定着などがある。これらに共通するのは、消費者として受動的に作品に接してきたファンたちが、自ら積極的に作り出し、見出し、共有し、楽しんでいるという点である。

総括では、現代社会の特性である ICT 発展による若者のコミュニケーションのスタイル・質・量の変化と、アニメ作品をめぐるビジネス環境の変化を結びつけた上で、将来にわたってのアニメの作品内容と楽しみ方の変化を展望した。

2019年度 相愛大学人文学部公開講座

人文学を楽しむ Part3

日ごろ人文学部の活動にご理解ご協力を賜り、ありがとうございます。毎年恒例の公開講座を引き続き「人文学を楽しむ」というテーマで、開催いたします。本学の教員がそれぞれの専門分野(東洋史・社会学・仏教学・臨床心理・サブカルチャー)の話をご存分に語ります。人文学の広がりや深さを楽しんでいただけるものと存じます。多くの方々のご来場を心よりお待ちしております。

<p>6月8日 土</p> <p>私説三国志 三大戦争の史実</p>  <p>教授 中村 圭爾</p>	<p>7月13日 土</p> <p>沖縄の軍用地と郷友会</p>  <p>教授 藤谷 忠昭</p>	<p>9月21日 土</p> <p>『歎異抄』と蓮如上人 一人々を救う言葉のはたらき</p>  <p>准教授 佐々木 隆晃</p>
<p>10月5日 土</p> <p>ストレスと上手につきあう —臨床心理学からみる心の健康—</p>  <p>准教授 坂田 真穂</p>	<p>2月15日 土</p> <p>変わりゆく アニメの楽しみ方</p>  <p>准教授 高木 学</p>	<div style="border: 2px solid black; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p style="font-size: 2em; font-weight: bold;">入場無料</p> <p style="font-weight: bold;">お申し込み 不要</p> </div> <p>※当日、満席になり次第締め切らせていただきます。 ※4回以上ご出席の方には最終回に修了証をお渡しいたします。 ※講座の妨げになると判断する行為を行った場合は、御退場いただくことがありますので、予めご了承ください。</p>

日時 土曜日 14時～16時 (13時40分より受付開始)

実施場所 相愛大学 本町学舎 F604教室
Osaka Metro御堂筋線「本町」駅C階段3出口より徒歩5分

お問い合わせ先 相愛大学人文学部合同研究室 (平日9時00分～17時00分)
〒559-0033 大阪市住之江区南港中4-4-1
TEL:06-6612-6252 E-mail:jibunbungakubu@soai.ac.jp



主催:相愛大学人文学部 後援:相愛大学総合研究センター

教員免許状更新講習（高・中）

本学は、教員免許更新講習実施の申請を行い、認定を受けているが、中学校・高等学校教員免許に関して、2014年度からは隔年で音楽科と国語科の講座を開催している。

2019年度は国語科に関して、3つの講座を開催した。テーマは、講座Ⅰ「和歌史の中の『百人一首』」（担当：鈴木徳男教授・川中美津子教授、8月6日）、講座Ⅱ「『古事記伝』を読む」（担当：千葉真也教授、8月7日）、講座Ⅲ「古典研究の先達」（担当：鈴木徳男教授・千葉真也教授、8月8日）である。

〈講座Ⅰ〉和歌史の中の『百人一首』

講座Ⅰは和歌のアンソロジーとして著名な『百人一首』をめぐって、成立・性格・解釈の三項目をたてて講義を行い、さらに王朝の文化の一端を実地に体験することを意図として、本学所蔵の唐衣裳装束の着装の見学も行った。



(1) まず、藤原定家による歌仙秀歌撰という基本的な「性格」を確認して、そこからはみだす様々な要素を考えつつ、資料を用いて基礎的な知見をまとめて述べた。講義後半、受講生から『百人一首』を活用した教育の現場での取り組みを聞いた。それらを参考にしながら、(3)や(4)において、現場で活かせる解説を心がけた。(鈴木徳男)

(2) 百人一首の舞台である平安時代の文化を知って頂くために、画像資料と堀口洋子・木村倫子両氏による本学所蔵の唐衣裳装束の着装を見学しながら、平安時代の人々の美意識や生活についての説明を行った。

また、事前に着付けた衣冠の装束の男性と唐衣裳装束を着装した女性との並んだ姿を見て頂いた。

その後、希望される方には、唐衣裳装束に袖を通し、重さを含めて言葉では表せないものを感じて頂けたと思う。

(川中美津子)

(3) 『百人一首』の「成立」について、その経緯を和歌史の展開をふまえて解説。承久の乱との関わりや『百人秀歌』の存在を述べて、史的背景の複雑さを考えた。あわせて和歌研究の現状を話した。

(4) 「解釈」の問題点として、それぞれの和歌についての、出典（勅撰和歌集）と選者藤原定家の理解の食い違いを取り上げた。たとえば、素性歌（二一）をめぐって、『古今和歌集』の配列からみる契沖の『百人一首改観抄』などの説と『顕注密勘』にみえる定家説とが対立している。和歌の解釈の奥行きや享受の広がり論じた。

(鈴木徳男)

〈講座2〉『古事記伝』を読む

本居宣長の『古事記伝』は、現在でも高く評価されており、現代の『古事記』解釈も『古事記伝』を土台としている。しかし、注釈書である『古事記伝』は、専門家以外にはあまり読まれないことがない。講座2は『古事記伝』の注釈史における意義、注釈の方法、注釈そのものについて紹介した。具体的には次のような内容である。

①『古事記』受容史

②本居宣長と契沖・賀茂真淵 本居宣長が著作によって大きな影響を受けた契沖、主に書簡のやりとりによって懇切な指導を受けた賀茂真淵について紹介した。

③『古事記伝』の構成

④『古事記伝』一之巻の紹介 一之巻は『古事記伝』の総論である。とくに本居宣長が『古事記』の仮名や助字について綿密な研究を行っていることを紹介した。『古事記伝』の実証性は、そのような細部によって支えられていることを紹介した。

⑤古事記伝三之巻の紹介 『古事記』の冒頭について注釈の行われた三之巻を取り上げた。「天地初発」の中の「天地」の二文字について、2000字以上を費やす細密さを実感していただくのが意図である。(千葉真也)

〈講座3〉 古典研究の先達

賀茂真淵・正岡子規・橋本不美男・田中重太郎の四人を取り上げ、現在の古典受容が古典研究に情熱を傾け、あるいは一生涯を費やした人々の営みの上に成り立つことを紹介した。江戸時代から明治に業績を残した賀茂真淵と正岡子規を千葉真也、昭和時代に活躍した橋本不美男と田中重太郎を鈴木徳男が担当した。

(1) 賀茂真淵

彼の情熱的な仕事によって『万葉集』は最もよく親しまれる古典となった。『古今和歌集』のような優美な美しさだけが文学の価値ではないことを真淵は力説し、やがて「万葉集=ますらをぶり」「古今集=たをやめぶり」という通説が生まれる。『万葉集』の時代区分や歌人の評価、一つ一つの訓みについても、真淵説の影響は大きい。源実朝を高く評価しているのも重要である。

(2) 正岡子規

明治時代の短歌と俳句における先達である正岡子規は、古典文学の受容においても先達・案内者としての役割を果たした。『万葉集』を高く評価する一方で、『古今和歌集』や『百人一首』を貶めた子規の主張は昭和に至っても強い影響力を持っていた。さらに俳句において、与謝蕪村の価値を発見したのも子規である。真淵と子規は新たな価値の創造者である。

(3) 橋本不美男

ながく宮内庁書陵部につとめた橋本不美男は、『王朝和歌史の研究』などの著作があり、和歌史研究会の代表格として戦後の和歌研究をリードしてきた。橋本が進めた書陵部の所蔵本の公開は和歌研究の画期を示している。今回は、その著『原典をめざして—古典文学のための書誌』をとりあげ、古典、とくに和歌文学の実証的研究について紹介した。

(4) 田中重太郎

田中重太郎は、『枕草子』研究をライフワークにし、その旧蔵書を核として本学の「春曙文庫」が設立された。その学問、とくに『校本枕草子』を中心に、文庫との関連で考えた。最後に「春曙文庫」の展示を実際に見学して、文庫の価値を確認してもらった。

教員免許状更新講習（幼稚園）

1. はじめに

子ども発達学科に幼稚園教諭一種免許状および小学校教諭一種免許状に係る教職課程が設置され、10年以上が経過した。この間、多くの卒業生が幼稚園、認定こども園等の教育・保育現場に就職し、実践に携わっている。今年度から、卒業生（本学科1・2期生）も教員免許状更新講習（以下、更新講習）の受講対象者となり、母校での更新講習開催の必要性が確認できた。さらには、教育研究機関である大学としての社会貢献及び現場との協働という意味でも重要と判断している。実際、本学と連携事業の実績がある大阪府社会福祉協議会保育部会や、定期的に連絡研究会を共同で実施している大阪市私立保育連盟加盟園からは毎年要望があり、その期待・信頼に応えるべく、平成29（2017）年度から継続的に開講してきた。

周知の通り、教員免許更新制は、平成21（2009）年度から導入されている。その後、子ども・子育て支援新制度開始に伴い、幼保連携型認定こども園の保育教諭や、認可保育所（幼保連携型認定こども園へ移行予定等）の保育士の受講ニーズが増大している。その反面、幼稚園教諭や保育教諭向けに内容を特化した講座の開講数が少ないため、昨年度までは受付開始当日に応募が殺到し、定員充足となる事態が起っていた。本年度は受付方法等を改良し、教員

免許更新制の目的（「その時々で求められる教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指す」）を踏まえ、昨年度以上に各講座内容の充実を図った。開講形式は、幼稚園教諭・保育教諭が現場で抱える課題をテーマにした必修領域、選択必修領域、選択領域すべての領域を5講座セット受講とし、5日間の一括受講で修了できるようにした。

なお、昨年度と同様、休日開講日を設定するとともに、選択講座数は4講座で実施した。

2. 実施内容

【実施年月日】

令和元（2019）年8月9日（金）・10日（土）・19日（月）・20日（火）・21日（水）（5日間）

*5日間とも、9:30～16:40に講義・演習・筆記試験、16:40～16:50にアンケート実施。

【会場】相愛大学南港学舎（学生厚生館S307・7号館425）

【定員】100名（申込みは先着順）

【講習運営事務局】

子ども発達学科講習運営担当部（中西・直島・松島・曲田・和田・社・向井）

*子ども発達学科合同研究室に事務局を開設し、教学課と連携して運営した（教職課程合同研究室とは独立運営）。

【講座名・担当者等】

*全講座（5講座セット／選択Ⅱ・Ⅲは同日開講で、どちらかを選ぶ形式）での受講。

区分	講座名	開講日	講師名
必修	今、園づくりに求められる幼児教育の在り方	8月9日（金）	中井清津子

選択必修	園、家庭、地域との連携及び協働	8月10日(土)	中西利恵
選択Ⅰ	子どもと環境	8月19日(月)	曲田映世／進藤容子
選択Ⅱ	子どもをめぐる社会問題と子どもの権利	8月20日(火)	松島京
選択Ⅲ	保育の質を支えるカウンセリングの理論と技法		実光由里子
選択Ⅳ	発達障害のある子どもへの支援	8月21日(水)	直島正樹

【講座内容】

各講座とも、現在の教育・保育現場が抱える課題を取り上げた。ここでの学びを持ち帰り、日ごろの教育・保育に役立て、幼児教育の質の向上につながるよう、以下のような内容で構成した。

○必修：今、園づくりに求められる幼児教育の在り方（中井 清津子）【講義（演習含む）】	
<p>必須領域の「国の教育政策や世界の教育の動向」「教員としての子ども観、教育観等についての省察」「子どもの発達に関する脳科学、心理学等における最新の知見（特別支援教育に関するものを含む）」「子どもの生活の変化を踏まえた課題」についての講義内容を設定し、幼児教育の今後を展望する新たな視点の獲得をめざします。特に新幼稚園教育要領の求めている方向性について理解し、各自の実践を通して協議を深め、「幼児教育の質的向上」を求めた幼児教育の在り方について考え、実践力の向上につなげていきます。</p>	
○選択必修：園、家庭、地域との連携及び協働（中西 利恵）【講義（演習含む）】	
<p>乳幼児期における教育及び保育において「園、家庭及び地域の連携及び協働」として、園における生活が家庭や地域社会との連続性を保った展開、地域の自然、人材、行事や公共施設などの地域の資源を活用し、園児が豊かな生活体験を得られるような工夫、保護者が乳幼児期の教育及び保育に関する理解が深まるよう家庭との連携、小学校教育への円滑な接続に向けた連携などの取組が求められます。本講習では、それらのあり方や実践について考えていきます。</p>	
○選択Ⅰ：子どもと環境（曲田 映世・進藤 容子）【講義（演習含む）】	
<p>「音環境」を教育的な視点から捉えます。自然音も含めた身の回りの音から子どもの感性を高める方法や音環境のあり方を考えていきます。また、「子どもの食」を教育の視点から捉え、子どもの主体的な活動をひきだし、心身の発達をうながす食環境とは何か、教育者としての視座を探ります。</p>	
○選択Ⅱ：子どもをめぐる社会問題と子どもの権利（松島 京）【講義】	
<p>近年の社会状況の変化に伴い、家庭内暴力・虐待、貧困、不就学、無戸籍など、子どもをめぐる社会問題は増えています。今後、幼稚園等教育・保育施設における子どもと保護者に対する支援はますます求められるでしょう。</p> <p>本講習では、これら問題群の現状と社会的背景を整理したうえで、現場実践につながる、保育者に求められる支援のあり方（子どもの権利保障という視点の重要性）について考えていきます。</p>	
○選択Ⅲ：保育の質を支えるカウンセリングの理論と技法（実光 由里子）【講義（演習含む）】	
<p>人は誰しも各々の信念や価値観を持ち、それに基づいて自分を取り巻く世界を知覚します。これに気づかないまま他者と接すると、相手を意図せず傷つけてしまうことがあります。保育者自身の気分の落ち込みや苛立ちにもつながるでしょう。</p> <p>本講習では、カウンセリングの理論を学び、自己への気づきや理解を深めます。また、技法の演習を通じて、子どもや保護者より良い関係を構築する対応を探っていきます。</p>	
○選択Ⅳ：発達障害のある子どもへの支援（直島 正樹）【講義（演習含む）】	
<p>近年、幼稚園や保育所等の教育・保育現場において、発達障害のある子どもが増加していると言われます。各現場では、そのような子どもへの支援について、さらには保護者に対する支援のあり方が問われ、試行錯誤をくり返しています。</p> <p>本講習では、発達障害のある子どもを取り巻く現状、特性等を整理したうえで、子どもの「理解のしづらさ」、教育者・保育者に求められる子どもおよび保護者への支援のあり方等について考えていきます。</p>	

3. 実施状況と結果

例年同様、本学ホームページでの開講告知前から多数の問合せがあった。申込み開始日（5月14日）から約2週間後の5月27日には定員を超え（114名）、募集を締め切る状況となった。

その後、「職場業務の都合」等を理由とする辞退者や、講座受講料未入金者が例年以上に多く、再募集を行った。再募集期間中にも辞退者があり、最終募集締切日（7月23日）までに約60名を数えた。現場からの開講要望はあるにも関わらず、辞退者数が当初の予想以上であったため、その背景について大阪府社会福祉協議会保育部会や大阪市私立保育連盟加盟園へリサーチを行った。それを踏まえると、e-learningや放送大学等での講座開設が急速に進み、自宅で受講可能な利便性等により、受講対象者の多くがそちらに流れたことが主な要因と推測される。そのような中で、最終的には95名の受講があり、全員が全講座を修了された。この中には、学生の実習先、就職先等、本学とつながりのある園の先生もおられた。さらに、母校で受講してくれている卒業生の姿もあった。

各講座終了後のアンケートでは、「非常にわかりやすい講義で、勉強になった」「（学生として）相愛大学で学んでみたいと感じた」「多くのことを学び、今後の保育に活かしながら日々頑張っていきたいと思えた」「先生同士の仲の

良さ（連携が図れている）を感じた」等の感想・意見が多数を占め、本講習開講の意義や、担当教員間の連携の重要性等が今回も確認できた。

また、講習初日に、本学科の学生らがスタッフとして駅から会場までや食堂等への学内案内を担当した。そのスタッフに対して、「お疲れ様です」「ありがとうございます。助かります」等、やさしく声をかけてくださる受講者がおられたことも付記しておきたい。

4. 今後の計画と課題

実施後に、講習運営事務局及び講師全員で振り返り会議を行い、実施の検証と次年度に向けた課題の抽出を行った。講義内容をはじめ、開講告知の時期・日程、受講要項への記載内容・方法、募集締め切りのタイミング、辞退者への対応、事務作業のあり方等について経験・反省を踏まえ、次年度の計画を検討した。

次年度の講習実施にあたっては、アンケート内容の分析を行った上で、受講対象者のe-learningや放送大学の活用状況等を把握しながら、ニーズへの対応について検討していきたい。引き続き、地域における教育研究機関としての存在価値を高めると共に、卒業生等のリカレント教育機関としても継続的な学びの場を提供するため、より現場のニーズに対応した更新講習になることを目指したいと考える。

（文責：直島・中西）

【写真：講習風景】



特別演奏会助成公演

稲垣聡 室内楽シリーズⅡ
～世の終わりのための四重奏曲～

音楽学部教授 稲垣 聡

1. 開催目的：20世紀音楽・フランス近現代室内楽作品の楽曲研究と演奏。

2. 日時：2019年2月17日（日）開演14:00
（開場13:30）

3. 会場：ザ・フェニックスホール（大阪）

4. 入場料：一般／3,000円（当日 3,500円）
学生／1,000円（当日 1,200円）

5. 来場者数：167名（招待客含む）

6. 出演：ピアノ／稲垣 聡

ヴァイオリン／田中 佑子

チェロ／中島 紗理

クラリネット／奥山 芳弘

7. 曲目：

(1) C. ドビュッシー：クラリネットとピアノ
のための第1狂詩曲（1909-10）

C. Debussy：Première Rhapsodie pour Clarinette
en si bémol et Piano

(2) C. ドビュッシー：チェロとピアノのため
のソナタ（1915）

C. Debussy：Sonate pour Violoncelle et Piano

(3) C. ドビュッシー：ヴァイオリンとピアノ
のためのソナタ（1916-17）

C. Debussy：Sonate pour Violon et Piano

* * Entracte * *

(4) O. メシアン：世の終わりのための四重奏

曲（1940）

Olivier Messiaen：Quatuor pour la Fin du Temps

I. 水晶の典礼

Liturgie de cristal

II. 世の終わりを告げる天使のためのヴォカ
リーズ

Vocalise, pour l'Ange qui annonce la fin du
Temps

III. 鳥たちの深淵

Abîme des oiseaux

IV. 間奏曲

Intermède

V. イエスの永遠性への賛歌

Louange à l'Éternité de Jésus

VI. 7つのトランペットのための狂乱の踊り

Danse de la fureur, pour les sept trompettes

VII. 世の終わりを告げる天使のための虹の錯乱

Fouillis d'arcs-en-ciel, pour l'Ange qui annonce la
fin du Temps

VIII. イエスの不滅性への賛歌

Louange à l'Immortalité de Jésus

8. 調律：土井 政人

9. 制作協力：おふいすべが <http://office-vega.net>

近・現代作品、とりわけ20世紀音楽の楽曲研究と演奏は私の研究課題の一つである。20世紀音楽は、多くの作曲家の探求によって、様々な音楽語法（作曲技法）や表現方法などが多彩であり、ルネッサンス、バロック、古典派、ロマン派といった長い西洋文化における音楽芸術の歴史と伝統を包括した上に成り立つ分野でもあるといえる。一昨年の特別演奏会助成では、O. メシアンとG. フォーレのピアノと声楽による室内楽作品を取りあげたが、今回は同じ20世紀・フランス近現代のピアノを含む器楽による室内楽でO. メシアンとC. ドビュッ

シーの作品に焦点をあて、楽曲研究と演奏を研究目的として開催した。

また、私は本学卒業生とともに同じステージで共演できるコンサートの企画と可能性を数年前より探っており、本学内で私と授業や室内楽レッスン等で何らかの接点があり、また卒業後にそれぞれ多くの研鑽を積むことで、現在では若手・中堅演奏家として着実にキャリアを積んでいる田中佑子（ヴァイオリン）、中島紗理（チェロ）、奥山芳弘（クラリネット）の3人の卒業生を、今回共演者に迎えて一緒に演奏できたことも開催の大きな意義であったといえる。

演奏会前半は、共演者一人ずつと私によるデュオ作品、C. ドビュッシーの『クラリネットとピアノのための第1狂詩曲』『チェロとピアノのためのソナタ』『ヴァイオリンとピアノのためのソナタ』を演奏、後半には第2次世界大戦中にドイツ軍の捕虜として、シレジアのゲルリッツ第8A捕虜収容所に収監されたO. メシアンが、ヨハネの黙示録第10章から啓示を受けて同収容所内で作曲され、暖房の全くない極寒の中で多くの捕虜たちが見守るなか初演されたという有名な逸話のある作品『世の終わりのための四重奏曲』を演奏した。

今回のプログラムは高度な技術と音楽性が要求されることから、安易に取り上げることのできない難曲揃いの作品であったが、共演者である若手演奏家たちは大きな重圧と覚悟をもって演奏に臨んでくれて、私自身も彼らの新鮮なパワーと素晴らしい演奏に大きな刺激を受けることができた。またそれぞれの楽曲の解釈と音楽表現の可能性、そして演奏法について様々な発見と実践ができたことは大きな成果だったといえる。来場者の方々より「なかなか聴く機会の少ない貴重なプログラムと充実した演奏」「教員と卒業生の共演といった大変意義のある演奏



終演後



練習風景

会」といった賛辞が多く寄せられ、今回も大谷紀美子学園長をはじめ多くの大学関係者にご来場頂けた。

今回もこのような貴重な演奏会が開催できたことに、学園関係者、関西音楽業界等に心からの感謝を申し上げたい次第であるが、この演奏会の特別演奏会助成申請の採択について不可解なことが生じたことを述べておきたい。研究助成運営委員会の審議により一応採択はされたが、ザ・フェニックスホールでの開催が認められず「本学のホールを使用すること」という条件がつけられ、それについて理由が全く明記されておらず、この審査結果について私自身すぐに承諾することができなかつたのである。このような結果に至った理由の一つに、私が申請書においてザ・フェニックスホールでの開催理由

についての記載が充分でなかったことが予想されたが、そもそも演奏家が外部のホールで演奏会を開催するにあたり特別な理由が必要なのだろうか。この件について多くの疑問と疑念をもった私は、内々に他大学の専任教員を含む音楽業界関係者に尋ねてみたところ、全員から「あり得ないこと」「相愛大学は教員を優れた演奏家（研究者）と認めていないのか」という答えであり驚愕されていた。確かに「南港ホール」は優れた音響に恵まれ、音楽学部教員によって開催される学内演奏会は入場無料ながら高度な演奏水準を誇るものではあるが、特別演奏会助成公演はこれら学内演奏会やオープンキャンパス的なもの、まして教員による発表会ではないはずである。そもそも演奏会は開催趣旨、内容（曲目）、演奏水準はいうまでもないが、合わせて主催がどこであるか、どのホールで演奏するかということも演奏実績として重要なのである。今回の演奏会は、前回の特別演奏会助成公演（2016年3月）と同様に、私のこれまでの演奏経験と実績から考えられた内容であり、多くの労力と時間を要した準備の上で舞台に臨む

わけで、おのずと演奏会場の選択は慎重かつシビアにならざるを得ないのは当然のことと考える。「ハイグレードな室内楽ホール」と高評価なザ・フェニックスホールでの演奏会開催は音楽業界にとってもステータスであるとともに、来場客等のセキュリティーの面においても信頼がおけるといえる。昨今の本学園の財政状況から研究経費（助成希望額）の減額はやむを得ず、そのことについては十分に理解することができるが、「本学のホールを使用すること」の採択条件にもとづき研究経費に含まれたホール使用の賃借料が根こそぎカットされてしまい、経費の減額と開催希望のホールを却下する関係性は全くもって理解できず意味不明である。当然のことながら、この結果について再審議を求め、後日臨時研究助成運営委員会においてザ・フェニックスホールでの開催が認められたが「原則として本学のホールを使用すること」という規約は残っており、研究助成運営委員会は各分野の深い見識と審議が、果たして十分に遂行されているのか大きな疑問と憤りを感じざるを得ない。

相愛大学特別演奏会助成公演

稲垣 聡

室内楽シリーズⅡ

～世の終わりのための四重奏曲～



ピアノ 稲垣 聡 Piano/Satoshi Inagaki

C.ドビュッシー C. Debussy (1862-1918)

クラリネットとピアノのための第1狂詩曲 (1909-10)
Première Rhapsodie pour Clarinette et Piano

チェロとピアノのためのソナタ (1915)
Sonate pour Violoncello et Piano

ヴァイオリンとピアノのためのソナタ (1916-17)
Sonate pour Violon et Piano

O.メシアン O. Messiaen (1908-1992)

世の終わりのための四重奏曲 (1940)
Quatuor pour la Fin du Temps

ヴァイオリン 田中佑子
Violin/Yuko Tanakaチェロ 中島紗理
Cello/Sari Nakajimaクラリネット 奥山芳弘
Clarinet/Yoshihiro Okuyama

2019.2.17

[SUN] 14:00開演 (13:30開場)



あいおいニッセイ同和損保
ザ・フェニックスホール

(梅田新道・東南角 あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー内)

全席自由 一般 前売 3,000円 (当日 3,500円) 学生 前売 1,000円 (当日 1,200円)

*未就学児童のご入場はご遠慮ください。

*公演の妨げになると判断する行為を行った場合は、ご退場頂く場合があります。

●チケット取り扱い

ザ・フェニックスホール チケットセンター TEL 06-6363-7999 (土・日・祝を除く10:00～17:00 ※年末年始休業)

カンパティ チケットセンター TEL 0120-240-540 (平日 10:00～18:00) ※ご予約後セブンイレブンにてお引き取りいただけます)

●お問合せ

おふいさへカ TEL 0798-53-4556 Email info@office-vega.net

【主催】相愛大学 【制作協力】**おふいさへカ**

2019 年度外国人研究員活動報告

人文学部学部長 益田 圭

1. 概要

人文学部では、2019 年度 9 月 1 日より 2020 年 2 月 28 日までの 6 ヶ月間、中国の提携大学より 2 名の外国人研究員を迎えた。

一人目は、浙江農林大学より、文法学部日本語学科専任講師の張懿君先生である。張先生の当初の研究題目は、「児童文学における日本妖怪文化の伝承・発展」であった。張先生の研究テーマが妖怪文化ということから妖怪に関する作品も数多くあるサブカルチャーを担当している高木学准教授に指導教員をお願いした。

二人目は、長春師範大学より、外国語学部日本語学科専任講師の謝海丰先生である。謝先生の当初の研究題目は「芥川の童話作品を中心とした文学作品の研究」と「現代中国における日本語教育の問題点解決のための教育手法の研究」であった。謝先生の研究テーマが文学と日本語教育であることから、文学に造詣が深く、大学生のための日本語入門など日本語教育の経験が豊富な千葉真也教授に指導教員をお願いした。

二人とも、授業に参加するなど、相愛大学での 6 ヶ月間の研究生生活を積極的に送っていた。こうした研究員としての研究生生活の集大成として、人文学部が 2020 年 1 月 15 日に実施した「相愛大学人文学部公開研究会」において、二人の先生方から研究成果の発表があった。

2. 研究報告

(1) 張懿君先生

①相愛大学での研究課題

最初に『児童文学における日本妖怪文化の伝

承・発展』という研究課題を提出したが、現在は『絵本における狐のイメージの諸相』に変更している。

日本の妖怪文化は長い歴史を持ち、関連する文化現象をたくさん蓄積している。妖怪文化は絵巻で造形化されるという伝統があり、もともと見えない妖怪が画家たちの想像力で見えるように具体化・造形化された。現代では、絵本との出会いは子供の文学に対する歩みの始まりとして、重要視されつつある。日本には優れた絵本作品がたくさんあり、言葉と絵画で情報を伝達する表現媒体の絵本は子供の想像力、感受性、文学素質などの養成に役立つ。絵本の形象化の過程で、作家、画家等の創作への営みにより、新たな可能性が産み出される。その一方、絵本の表現で、見えていない世界へ近づこうとするが、やはり内的なイメージを喚起し、把握するという「読み取る」過程が必要になる。

狐は妖怪として怪異事件と繋がる一方、日本の稲荷信仰とも深く関わっている。そんな狐は子供向きの絵本には、どのように表現されるのか、どんなイメージが喚起され、具体化されるのかに関心を持つようになった。絵本は言葉と絵画表現の複合した有益な媒体である。

②研究報告の要旨

上述したように、研究課題を変更したのは、妖怪文化の資料調査を進める中で、神秘的な狐の存在に目を引かれたからである。

ここで対象とする資料は、まず、狐を主人公とする、或いは狐に関わる絵本合わせて 10 種類 14 冊ある。その中には、昔の伝説から絵本化するものもあれば、狐を創作的に描くものもある。また新美南吉童話の狐三作も入っている。名作なので、同じ言語テキストの作品であるが、絵本版が複数ある。

記述・考察する基本方法は、野村（2010）で

採用した方法を概ね参考にする。言語・絵画表現の複合したものとして、統一的に考察を進める。

現実の狐と稲荷信仰の概要を述べた上で、絵本の分析を進める。筋立てを述べながら、そのイメージの分析をする。擬人化の程度で、狐と人間のつながりが解明できる手がかりとする。今度選んだ絵本に登場する狐は、自然界によくある黄褐色の狐が圧倒的に多い。それは子供がよく目にする狐のタイプで、ある程度親近感が持ちやすいからだと思われる。怪異事件に関わる狐は、老狐、黒狐、白狐の場合が特に多いが、絵本では、金色は妖狐で、白狐は神聖な神、純粋な母のイメージにつながる。そして、昔の恐ろしい妖怪、神秘的な神というよりも、現代的な雰囲気を持つ奇妙なものとして捉えられ、娯楽の世界のものと位置づけられているイメージの方が上回る。最後に5種類のイメージを整理して、民俗・信仰などの要素との関わりにも言及しておく。

1. 敵対する妖狐：金毛九尾の老狐、妖術の強い、恐ろしい狐というイメージ。その代表は『玉藻前伝説』による女狐である。
2. 女性的である狐のイメージから、愛する優しい母の象徴になる。母親を慕う感情、母親への導きは、安倍晴明の母、『葛の葉』狐の伝承による。また仏教系稲荷の女神ダキニの力にも関わると推測できるだろう。
3. 狐が他界への神秘的な道案内である。現実と非現実の世界が交差する邂逅は、現実と空想の入り混じった面白み・深みがある。
4. 神聖な神として存在する。稲荷信仰に関わる祭り・行事に出る狐は国民の共同記憶として伝承される。
5. 狐のずる賢い天性を取り入れ、人間と好意的、積極的に接触・交流する物語が作られる。

娯楽的なものとしての面白い狐のイメージは日常生活からの脱出と見てもよいだろう。

今回の考察は時間的な制約があるため、限られた数量の絵本を考察の対象にした。今後は、絵本の多様な主題を取り上げて行きたいが、絵本の研究は伝統の伝承、児童文学素質の養成、作品創作などに繋がるので、大変意義のある課題であると信じている。

(2) 謝海丰先生

①相愛大学での研究課題

芥川龍之介は大正時代を代表する作家の一人で、多くの短編小説が知られている。彼は『赤い鳥』の創刊号に初めての童話作品「蜘蛛の糸」を発表し、合計約8篇の童話を完成した。作品を童話か、小説かと線引きすることは難しいが、膨大な芥川の創作の中で童話は、僅か数点にすぎず、量的には芥川の主要な分野だったということはいえない。

数が少ないとはいえ、芥川の童話を高く評価する論者も少なくない。『芥川龍之介の世界』で中村真一郎は次のように述べている。

彼の魂の尤も無垢な部分を盛ることのできた形式だった。彼はこれらの作品を残すことによって、恐らく小説だけだったなら、作りだされたかもしれない、理知的な冷血的な怪物である彼の肖像に、生き生きした暖かみと優しかとを加えることができた。

今回はこの8編の童話作品の中で、最後に発表した『白』を対象とする。この作品に関する議論の多くは、主人公である白犬のエゴイズムから作品を把握しようとし、作者である芥川龍之介の罪意識について言及しているが、私はこの作品を精読し、白が犯した罪について、本文そのものに密着した分析を試みる。

②研究報告の要旨

『白』は大正12年8月に、『女性改造』第二卷第八号に発表された、芥川龍之介の最後の童話である。一匹の白犬が、友達の黒犬が犬殺しに捕まろうとしたところを目撃するが、現場から逃げだしてしまう。その行為の「罰」として体が黒くなり、飼い主から追い出されるが、様々な勇ましい行為を重ね、最後は白に戻り、再び飼い主に迎えらるという話である。

この作品について、酒井英行は、次のように絶賛している。

収束部の感動——お嬢さんの黒い瞳にうつる、白くほっそりした犬のイメージには、知性を武器とした文学の世界の中で、冷笑と韜晦の仮面に隠されていたやさしさと抒情が、なんのてらいもなく流露している。龍之介は初めて罰されたエゴイズムを救済した。

しかし、本文を検討すると、エゴイズムを持っているのは、白だけでないこと、飼い主や他の子供など、様々な登場人物もエゴイズムと無縁でないことが分かる。白だけ罰をくだされたのは、不条理なことと思われる。

また、黒い体に変身した白は、新しい人生、別の自分を生きていくチャンスに恵まれていたのに、白は「黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに」自殺を望むようにさえなってしまう。変身した白は、「黒い白」として生きていくこともできたはずなのに、自分自身が持っている黒色への偏見と自己への執着とで、自己完結してしまった。これこそ、白の一番大きな「罪」であったのではないか。白は最後に、元の白い犬に戻ることができ、飼い主の「お嬢さん」と「坊ちゃん」に再び迎えられた。ハッピーエンドの形で終わってはいるが、実際にはまだ他者に心を開いていない。外見が黒くなった白を、いきなり「狂犬」と思い込み、何

度も「バット」で打った飼い主である。「救済」と言うには少し違和感のある結末になっているのではないか。芥川自身が『白』を発表した翌年、大正十三年に、発表した『少年』において次のように述べている。

由来子供は——殊に少女は二千年前の今月今日、ベツレヘムに生まれた赤児のように清浄無垢のものと信じられている。しかし彼の経験によれば、子供でも悪党のない訣ではない。それをことごとく神聖がるのは世界に遍満したセンチメンタリズムである。

このようなシニカルな視線をも考慮に入れて『白』の意味を考えるべきではないか。

3. 研究報告への指導教員からのコメント

(1) 高木学准教授より張颯君先生へのコメント

張協君先生は「絵本に見られる狐イメージの諸相」をテーマとした研究をおこなった。張氏は、まず日本にある狐の伝承や信仰を文献から読み解き、稲荷信仰・玉藻前などの伝統的なイメージを確認したうえで、絵本の『きんいろの狐』『てぶくろを買いに』『ごん狐』など著名な絵本から、狐に付与されたイメージを5つのパターンに分類した。狐のイメージの多様性、日本の独自性などを浮き彫りにする的確な分析となった。1月15日には発表会がおこなわれ、発表後の質疑応答では、人文学部の様々な分野の教員と意見交換・提案などを行うことができた。

短い研修期間にもかかわらず、多くの先行研究の精査、対象となる絵本の選定や分析が非常に丹念におこなわれており、たいへん優れた研究成果を挙げられた。

(2) 千葉真也教授より謝海丰先生へのコメント

作品の本文に密着し、自分自身の読みを細部

の表現から実証しようとする姿勢は好感が持てる。しかし、今回の対象である『白』を含め、短編小説を扱う際には、作家の書いた他の作品に対する目配りが必要になる。本発表においてそれが疎かになっているわけではないが、より網羅的な検討が加えられたらと思う。長編小説よりも対象としては困難かも知れないが、そのような営為によって、この作品を作家活動全体の中に位置づけることが可能になる。また、先行研究に対する向き合い方も課題の一つである。芥川を対象とした論文は膨大であり、研究成果の全部を網羅することは難しい。だが、先行研究との関連を丁寧に確認することで、今回の研究の独自性も明確になったのではないかと思う。とはいえ、短い滞在期間の中で十分に行うのは簡単ではない。今回の発表は、発表者がより精緻な研究を展開する足がかりとして十分なものだと考える。

4. まとめ

2020年度に提携大学である浙江農林大学と長春師範大学より人文学部に迎えた、お二人の外国人研究員である、張颯君先生と謝海丰先生の6カ月間の研究活動について紹介してきた。これまで述べてきたように、張先生も謝先生も6カ月間の研究生生活を、それぞれの研究や本務校での日本語教育のスキルアップのために、十分に有効に活用されているということができた。誠実に真摯な姿勢で研究に取り組み、快活に人文学部の教職員と交流する姿は非常に印象的であった。

相愛大学での今回の外国人研究員としての研究活動が、お二人の活躍、そして提携大学である浙江農林大学と長春師範大学の発展につながることを期待したい。